

# Little Scribblers Early Learning Centres Southport 訪問

こみね幼稚園 副園長 小峰 和人

## 1 はじめに

海外研修に参加するに当たり、私はオーストラリアと日本の教育には、大きく分けて 3 つの違いがあると認識していた。「システム」「生徒の姿勢と質」「環境」だ。そして、オーストラリアは世界的に ICT 教育の先進国であるため、iPad を使った授業についてはとても興味を持っていた。

また、オーストラリアは授業中、子供たちが静かにする文化がないと言うことを耳にしたことがある。その点については日本の幼稚園教育とそれほど変わらないのではないかと考えていた。今回の視察で、自分の見てきたもの、感じたことを述べたいと思う。

## 2 幼稚園概要

2019 年 9 月 6 日の昼下がり、私立学校教員海外研修団は、Little Scribblers Early Learning Centres Southport を訪問した。当園は、教育哲学者の Reggio Emilia の考えをプログラムに取り入れ、幼児たちのユニークな才能、能力を尊重し、育てているということだ。概要は次のとおりである。



幼稚園前の看板

- ・生後 6 週間～6 歳児まで預かっている。日によって人数が違うが、平均 30～40 人
- ・月曜から金曜の、朝の 6 時から 18 時まで
- ・生後 6 週間～15 カ月のクラスは教員 1 人に対して幼児 4 人、2 歳～3 歳のクラスは教員 1 人に対して幼児 5 人、3 歳～5 歳のクラスは教員 1 人に対して幼児 11 人を担当
- ・モーニングティー、アフタヌーンティーにはフルーツを提供。食事は全てデリバリーで用意、アレルギーや宗教上の問題も個別に対応
- ・キンディーループと言うアプリを入れて保護者が子供の様子を見ることができるようになっている。
- ・他園では掃除やメンテナンスは業者が入るが、この園は家族経営の私立幼稚園のためすべて教員が行っている。
- ・夫婦共働きの場合は政府から助成金が 3/4 出る。助成金は夫婦の収入によって変わる。  
※共働きでないと自費負担額が増えるとのこと

### 3 Little Scribblers Early Learning Centres Southport で大切にしていること

この幼稚園で大切にしていることを聞いてみたところ、幼児たちが何に興味があるのかを考え、見極められるようにしているとのことであった。教員ができるだけ長い時間、幼児と一緒にいるようにし、幼児たちが何を考えているのか、何がしたいのかがわかるようにしている。保護者とのコミュニケーションも大切にし、家での様子なども保護者から詳しく聞くようにしている。また、幼児たちの自主性を育てることも重要と考えているとのことであった。そのために、例えば海の生物を描くときでも、海の生物だから色は『青』と決めつけるのではなく、幼児たちが好きな色で好きなように表現させているそうである。

### 4 プレップクラスの現場

海外研修の初日に訪問した Hilliard State School では、プレップクラスも併設していたので、それに関しても記しておきたい。

オーストラリアでは、6歳になる年の学年（日本でいう年長クラス）を『プレップクラス』という。プレップクラスでは“小学校にあがるための準備”を意識してプログラムが組まれていた。そうすることで小学校が始まった時のスタートラインの底上げを行っているのではないかと思われた。

日本の幼稚園では、『要録』を書き小学校へ引継ぎとして提出しているが、オーストラリアでは“ONE SCHOOL”と言うアプリを使い、幼児の情報を誰でも見ることができる（IDとパスワードで閲覧範囲が変わる）ようにし、小学校の教員へ引き継いでいた。

また、幼児のカリキュラムも教員が決めるのではなく、幼児たちの関心をベースに、そこから色々と広げたり考えさせたりしていた。日本では教員が主体的にカリキュラムを進めていくことが多いが、オーストラリアでは幼児たち主体で進めることにより、幼児たちがどんどん能動的に動くようになったということである。

下の4枚の写真を見比べていただきたい。全て同じクラスで行われていた活動である。皆が別々のことをしている。話を聞いたところ、iPadは、保育をする上で教員の必要に応じて使用しており、場合によっては紙と鉛筆を使用するとのことであった。iPadでYouTubeを流し、低年齢児はそれを見ながら踊ったり、また他の幼児には教員が絵本の読み聞かせを行っていた。

なお、小学校ではゲームの『マイクラフト』を使って授業をしていた。グループ毎に、火星に住むためにはどうすればいいとか、あるグループが作った大都市に教員が大雨を降らせて被災させたが、どうすれば復興できるのか等様々な課題を渡し、児童たちは課題をクリアするためにグループで話し合い解決していった。

“ゲーム＝遊び”ではなく、学習するためのツールとして、自然体でゲームを利用していった。



④ コンフィネンス

→自信をもって学習をして行ける

⑤ 効率的なコミュニケーション

→コミュニケーションを図るために外国語に触れ合う（外国人が多いため色々な他言語と触れ合うようにしている）

## 6 おわりに

ICT 教育とは、パソコンを使って何か難しい勉強をすることではない。オーストラリアで目の当たりにした光景は、iPad で YouTube を流したり、iPad を使って幼児に画像を見せてあげたりするのに使っていた。つまり、パソコンや iPad が主役なのではなく、あくまでも授業効率をあげるために電子機器を使っているのである。そこに気が付いたとき、一気に ICT 教育の敷居が低くなり、自園で取り入れることの現実感が増した。

文頭に書いた“静かにする文化がない”という点だが、自分が思い描いていた状況と少し意味合いが違っていた。オーストラリア教育は日本の教育と異なり、グループワークがととても多い。教員が各グループに課題を与え、それに対してグループ毎にディスカッションをし、発表する。そのため、各々のグループが調べ物や相談を行っているときは、立ち歩いている児童がいたり、おしゃべりをしている児童もいて、確かに賑やかである。しかし、皆は課題をクリアするために必死に頑張っていたのだ。その辺が言葉足らずで自分に伝わったのかもしれない。

子供達の能動的に授業にのぞむ姿勢は、自園でも是非とも参考にしたい部分である。そのためにどうすればいいのかを試行錯誤していくことがこれからの課題と考えている。



Little Scribblers Early Learning Centres Southport 園舎全体